

遊びや生活の中で非認知能力を育む在り方

奥村正彦

岐阜女子大学 文化創造学部

(2021年11月8日受理)

How to Develop Non-cognitive Abilities in Play and Life

Faculty of Cultural Development, Gifu Woman's University

OKUMURA Masahiko

(Received November 8, 2021)

要 旨

非認知能力は目標に向かって粘り強く取り組んだり、他者と協働したり、思い通りにならないことがあっても、感情を整えたりするなどの力を言い、幼児期に顕著に発達し、長期にわたって持続し、学力向上や社会で活躍する鍵となることが欧米の長期縦断研究によって明らかにされている。課題は、幼児期の遊びや生活の中で、どのように非認知能力を育むとよいのかである。本稿において、実践してきたことを報告するとともに、実践したことに対する保護者評価を基にして、子どもの遊びや生活の中での非認知能力の育み方を提案する。

キーワード：非認知能力，保育目標，指導・援助，連携

1. はじめに

「非認知能力」を世界で初めて提唱したのは、2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・J・ヘックマンである。彼は就学前プログラムの研究を行い、対象の園児が40歳になるまで追跡調査をすることにより、就学前教育がその後の人生に大きく影響を与え、重要なのは、非認知能力であることを示した。

この研究成果が昨今、幼児教育関係者の注目を集めている。

OECDは2015年からEducation 2030プロジェクトを進めており、その中でも、幼児期に「非認知能力」の育成を図ることの重要性を述べている。

2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針においては、育みたい資質・能力の卒園時の具体的な姿として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記されている（ア 健康な心と体 イ 自立心 ウ 協同性 エ 道徳性・規範意識の芽生え オ 社会生活との関わり カ 思考力の芽生え キ 自然との関わり・生命の尊重 ク 数量

や図形、標識や文字などへの関心・感覚
言葉による伝え合い コ 豊かな感性と表現)。

内容を見ていくと、非認知能力と大きく関わっていることがわかる。

非認知能力については、いろいろな要素があげられているが、共通していることとして、①目標への情熱 ②忍耐力 ③自己抑制 ④コミュニケーション力 ⑤協調性 ⑥思いやり ⑦自尊心 ⑧対処能力・楽観性 ⑨自信 とした。

この9の要素と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは次のように関連付けることができる(大きく関わる内容のみ記載)。

アと① イと①・②・⑦ ウと⑤ エと⑥・⑨ オと⑤ カと⑦・⑧ キと⑥ クと① ケと④ コと④・⑨

幼児期に育みたい資質・能力の具体的な姿を示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と非認知能力との関連をみたとき、改めて、幼児期に非認知能力の育成について重視していく必要があることを確認することができる。

2. 非認知能力を育むための構想

幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園(以下、こども園)での保育・教育は、それぞれが独立した授業を展開する学校における教科と異なり、保育内容の5領域が相互に関連をもちながら、遊びを通して総合的に展開していくのが特質である。

非認知能力の育成の重要性をふまえ、日々の遊びや生活の中で、保育園に通う園児が非認知能力を獲得していくことができるための構想を明確にすることが必要である。

以下、2017年度、保育園園長として実践してきた取組を中心に報告する。

なお、研究にあたっては、乳児も非認知能力の育成を図る対象として、発達段階に即した実践をしていくこととした。

(1) 非認知能力の育成の重要性の理解

職員が非認知能力の育成を図ることの重要性を認識することが前提となる。そこで、園長として、職員会等を活用し、職員に非認知能力についての基礎的な理解を図ることとした。

- ・非認知能力とはどのような能力なのか
- ・非認知能力はどのように育成することができるのか

そのうえで、保育の目標と非認知能力との関連について把握することとした。

(2) 遊びや生活の具体場面でのねらいとつけたい力との関連の明確化

日々の活動において、保育者は活動のねらいをもち、活動の内容・環境構成を考え、実際場面で、子どもの活動を見守り、声かけなどの援助を行う。

園では、活動のねらいを明確にするとともに、2014年度からつけたい力を明らかにし、日案・週案・指導案に位置づけていた。つけたい力と非認知能力を関連づけることによって、無理なく活動をしていく中で、非認知能力を育成していくことができるととらえた。

(3) 0歳児からの取組を大切に

非認知能力は、3歳から8歳までが特に伸長すると一般的に言われている。

誕生してから発達が著しい3歳になるまでの間にも非認知能力の育成につながることもあるのではないかととらえ、できることを考え、取組を行うこととした。

(4) 行事への取組を大切に

子どもたちは、日々の遊びや生活をしていく中で、成長をしていく。したがって、非認知能力の育成においても、日々の遊びや生活の中で育成を図ることとし、その中でも、行事に着目した。

行事は、時間をかけて取り組むことが多い。その分、行事に取り組む中で、子どもにさまざまな力を育む機会があると言える。

そのため、行事を通して、どんな力を育むのか、その中で、どんな非認知能力が育成されるかを明確にし、取組を行うこととした。

(5) 発達段階に応じた取組の工夫

子どもたちの資質・能力の育成にあたっては、発達段階をふまえることが不可欠である。非認知能力の育成においても、発達段階をふまえた計画を作成し、具体化を図ることとした。

(6) 保育者の援助の在り方の明確化

子どもの活動時、保育者の子どもへの声かけが成長に好影響を与える。非認知能力の育成においても、どのような場面で、どのような声かけ等による援助があるとういかを明確にし、具体化を図ることとした。

(7) 家庭・地域との連携

小学校就学前に非認知能力の育成を図ることが重要であることを保護者・地域の方々にもよく理解いただく必要がある。そこで、機会をとらえて、理解を得ることとした。

- 元気に遊ぶ丈夫な子
 - みんなとなかよくできる子
 - 関心をもち、考え、表現できる子
- である。この目標に向かって生活する中で、人生100年を生きていくための基となる
- I 基本的な生活習慣を身に付ける
 - II 思いっきり遊ぶことができる
 - III 友だちと楽しく遊ぶことができる
 - IV 自分の思いを表現できる
 - V いろいろなことに挑戦できる
- の5つの力を育むように努めた。

この5つの力を育むことが、「非認知能力」の育成につながるととらえ、関連を次のように考えた。

- I と①・②
- II と①・⑨
- III と④・⑤・⑥・⑧
- IV と④
- V と①・②・③・⑦・⑨

このことについては、年度初めの職員会で、職員の共通理解を図るとともに、「園だより」にも記載し、保護者の理解を得るように努めた。

園だより第3号(2017年5月31日)には、以下のように記載している。

園では、0～5歳児の6年間で育みたい5つの力が、人生100年を生きていくための基となる力となると主張してきました。
(略) 園では、5つの力の育成に努めていく中で、非認知能力の育成を図ります。

(2) 遊びや生活の具体場面でのねらいとつけたい力との関連の明確化

園では、保育の目標の具現に向け、保育指導案や週案・日案に、つけたい力を記入した。具体的には、次のようである。

3. 指導の実際**(1) 園の目標とつなぐ**

園の保育目標は、

- 自分のことは自分でできる子

3歳児の日案 (2017年3月22日)

活動 りす組とお散歩(力Ⅲ)

<ねらい>

養護：保育者同士で連携・分担をして子どもを見守り、安全に歩いたり、遊んだりできるようにする。

教育：りす組さんに優しくしたり、お世話をしたりすることで、大きくなった自覚や進級することに期待をもつことができる。

予想される子どもの活動(○)

援助・配慮事項(◇)

○ 保育者の話を聞く。

◇ りすさんと散歩に行くことを楽しみにできるような言葉かけをするとともに、自分より小さい組の子に優しくしたりすることで進級する自覚・期待がもてるように働きかけていく。

優しくするとは、どういうことかを具体的な場面や行動で考えていくことで、意識をもち、実際に関わっていけるようにする。

○ 公園まで手をつないで歩く。

◇ ペアやグループでの確認をしながら、安全に過ごせるようにする。

○ 公園で遊ぶ。

◇ うまく関わりがもてている時はそばで温かく見守るようにし、一緒に遊ぶ。

なかなか関わりがもてないときには仲介に入り、きっかけを作ったり、意図的に関わる場をもったりする。

(注 展開については、一部掲載)

※ 力Ⅲは、つけたい力が「友だちと楽しく遊ぶことができる」の意味

※ つけたい力Ⅲの具体として、非認知能力の⑥を中心に、③・④・⑤の育成につながる。

(3) 0歳児からの取組

3歳になるまでの発達は著しいものがある。その中で、「基本的な生活習慣を身に付ける」ことが重要である。

これらができるようになるためには、「繰り返し」・「自分で」・「挑戦」がキーワードになる。

「手を洗う」・「排泄が自分でできる」・「衣服の着脱が自分でできる」などの基本的な生活習慣を身に付けることについては、3つのキーワードを実践することが不可欠である。

手を洗うことについては、保育者が「やってみせる」、次に「子どもの手をもってやり方を体で覚えさせる」、次には、「子どもの横にいて、少し援助する」、次には、「見守る」と段階をふみながら、繰り返し行うことで、できるようになっていく。

「排泄」についても、トイレトレーニングで失敗をしながらも繰り返し挑戦することにより、できるようになっていく。

「衣服の着脱」においても、「ジブンデ」と言いながら、うまくいなくても自分で袖を通したり、ボタンをかけたりしてみようと挑戦することが重要である。

こうした取組を通して、非認知能力の①目標への情熱 ②忍耐力 ⑨自信 の育成につながることを認識する必要がある。さらには、ここで培われた力が基になって、いろいろなことへの挑戦に発展していくことが考えられる。

こうしたことから、非認知能力の育成は、0歳からスタートするとよいととらえた。但し、特別なことをするのでなく、各園で行ってきた従来からの取組のもたらす効果を保育者が認識していくことが重要である。

(4) 行事への取組を大切に

子どもたちは行事に取り組むことを通し

て、さまざまな力を伸ばすことができる。行事への取組を通して、非認知能力の育成が図られることについて以下述べる。

○運動会の取組から

運動会行事では、年長児にとっては、鼓笛、器械体操の取組の発表など時間をかけて取り組んできた発表がある。したがって、それらの取組において、非認知能力の育成を図るよい機会であるにとらえた。

2017年度の運動会のめあてを「元気いっぱい、力いっぱい!」とし、どんな種目に対しても、自分の力を出し切ることにした。

年長組では、それを受け、「心をついに」を合言葉にし、鼓笛や組体操、リレーなどに取り組んだ。

以下、「園長につき」(ブログ No 1402・1404) から保護者の声を紹介する。

- ・楽器や組体操も先生の合図にちゃんと動いていてビックリしました。リレーもしっかりした走りでビックリしました。バルーンもリズムに合わせている姿をみて、すごく感動して、涙をこらえながら最後までみていました。帰りに、〇〇〇が「ママ泣いた?泣いていいよ。よくがんばったでしょ?」と言ったので、「よくがんばったね。ママ嬉しくて泣きそうだった。」と言うと、ニコニコ笑ってうなずいていました。
- ・組体操、鼓笛、リレー・・・とってもかっこよかったです。組体操では、笛に合わせてピシッとする姿、一生懸命歌を歌いながら小太鼓をたたき姿、人前にも大きな声で「がんばるぞー」と言うことができた姿、とってもとっても成長を感じました。そして、バルーン!!! 心を一

つにみんなでやる姿、本当に感動でした。ちなみに運動会終わっても、毎日運動会ごっこをしています。

二人の保護者の感想を紹介したが、子どもたちが運動会への取組を通し、非認知能力の①目標への情熱 ②忍耐力 ③協調性 ④自信などが育まれたことが伺えた。

(5) 発達段階に応じた取組の工夫

年少・年中・年長組を対象にした月一度の異年齢児活動(写真1)を、年長組の子たちがリーダーとして活動する機会にとらえた。その中で、非認知能力の①目標への情熱 ④コミュニケーション力 ⑥思いやり ⑨自信の育成につながるととらえた。異年齢児活動を実施するにあたっては、年長クラスでは、子どもたちに、どのように活動するとよいかを考えさせ、活動終了時には、振り返りをした。



写真1 年長組の子たちの働きかけで、楽しく活動する様子

(6) 保育者の援助の具体化

ア 子ども心の安定を図る

子どもが毎日、元気に登園することが、いろいろな活動に取り組む前提になる。信頼できる保育者がいてこそ、安心して園生活を送ることができる。

したがって、保育者は保育の要諦である「養護的な関わり」に力を注ぎ、一人一人の子どもとの信頼関係を築き、心の安定を図るよう努めることに力を注いだ。

イ 自ら取り組める環境づくりに努める

運動会の練習時、0～2歳児クラスの子たちが、自分より大きいお兄さん・お姉さんたちの運動会の練習や鉄棒の練習などをテラスから凝視している姿がよくみられた(写真2)。また、年長組のリレーの練習を年中組の子たちが見ながら応援している姿がみられた(写真3)。

異年齢の子どもたちの活動を自由にみることができると環境にすることで、年上の子たちの行動が年下の子たちにとって、モデルになるのである。

Aさんは、運動会を終えて帰る途中、公



写真2 お兄さん・お姉さんたちの練習を一生懸命に見る2歳児の様子



写真3 熱心に応援する年中児の様子

園で、鉄棒の練習をした。Aさんは、運動会で年長クラスの子たちが器械運動の取組の成果の発表で、連続逆上がりをする姿を見て、あこがれをもち、自分も「逆上がりができるようになりたい」と願い、自分から練習したのである。(運動会の翌日、Aさんの保護者から聞いた話である。)

子どもたちは、おみせやさんごっこや自然物を使っての遊びをする。子どもたちが遊ぶ中で、遊びが継続し、深まり、創意工夫が図られるよう、おみせやさんごっこに必要な小物やどんぐりやさまざまな形・大きさの葉を使いやすいように置いておき、子どもたちがしたいときに自由にすることができる環境をつくっておくことが必要である。

ウ 認め、ほめること

子どもたちが自発的にいろいろな遊びをしていく。その中で、非認知能力が伸びている。その育ちを保育者が見逃さず、認め、ほめることで、自信につなぐことができる。

以下は、園長として、実際に行った援助である。

- ・どろ団子づくりに夢中になり、硬くて丸い団子を見せに来た時、「〇〇君、すっごく硬いままるの団子できたね。先生には、こんなふうにはできないよ。どうやってこんなに硬い団子できるか、やり方教えてね。」クラスや園で取り組んでいることに対して、認め、ほめていくことが意欲の継続、達成につなぐことができる。
- ・「運動遊び」で縄跳びに挑戦した子どもたちが自由に遊ぶ時間に自ら練習している姿をみたら、練習していることをほめるとともに、「回して、縄が来る少し前にぴよんと跳ぶといいよ」、「今度は10回跳んでみよう」など言葉かけをすることにより、挑戦が継続できた。取組が継続するきっかけ

をつくることも必要である。

- ・誕生会での園長の話で、「秋みつけをしよう」と話すと、翌日からは、子どもたちは、園に来る途中や前日の間に拾っておいたどんぐり(写真4)や真っ赤な葉っぱやいろいろな形の葉っぱ、顔より大きな葉っぱを見せにくる。その都度、「〇〇君の顔より大きい葉っぱみつけたんやね。すごいね。こんな大きな葉っぱまだあるかな?」「どんぐりみつけたんだね。形や大きさのちがうどんぐりあるかな?」など、認め、ほめると同時に、さらに取り組める方向を示唆したりした。



写真4 どんぐりを笑顔でみせる様子

エ 個人差に応じること

クラス全体が、運動会での「器械運動の発表」に向け、鉄棒の「前回りおり」や「逆上がり」、「連続逆上がり」に挑戦しているとき、「どうせおれなんかできんもん」と言って、練習しようとしないう男がいた。C子は逆上がりの練習をし続けても、できないままであった。これらのことからわかるように、「誰にも得手不得手がある」こと、「努力してもできないことがある」ことである。

こうした現実をふまえ、B男に対しては、「B男君は、野菜を育てること大好きで、よく水やりやってくれるから、野菜がよく

育つんだよ。ありがとう。」とよい面があることを価値づけ、自信をもたせた。C子に対しては、「練習したから、足がよく上がるようになってきて、あと少しだね。一生懸命がんばったから、頑張る力がすごくなったよ。一生懸命にがんばったことがとってもよかったよ。」と価値づけた。

一つの取組だけで、その子をとらえないこと、結果のみで評価するのではなく、取り組む過程を大切に評価するという保育者の評価観に立ち、一人一人を認める声かけをしていくことが大切であることを確認した。

(7) 家庭・地域との連携

子どもの確かな成長のためには、家庭・地域との連携が不可欠である。

非認知能力の育成の重要性においても、園だより・園長につき(毎日発信のブログ)や保護者参観の折での園長の話の場を活用して、乳幼児期に非認知能力の育成に力を入れていくことの大切さを伝え、保護者・地域の皆さんの理解を得、家庭・地域においても意識して関わっていただくよう努めた。

2枚の写真(写真5・6)は、自由な時間での鍵盤ハーモニカの練習と縄跳びの練習時間を撮ったもので、どちらも子ども自らが目標に向かって自由時間に取り組んだ姿です。こうした姿は、園だより第3号(2017年5月31日発行)でお知らせした非認知能力(乳幼児期に非認知能力の育成に力を入れていくことが、将来、豊かな社会生活を送ることにつながる)にあたるものです。園では、写真のような子ども自らが目標に向かって努力する取り組みを大切にしていきたいと思えます。

(2018年1月16日ブログ「園長につき」NO.1457から引用)



写真5 鍵盤ハーモニカを自主的に練習する様子



写真6 自分から縄跳びに挑戦する様子

4. 考察

非認知能力の重要性について、園長から職員や保護者・地域の方々に話すとともに、園で非認知能力の育成につながる実践をしてきた。実践したことが、小学校に入学して以降の生活に生きているのか評価いただくため、2018年3月卒園児の保護者への調査結果の一部を紹介する。

(調査は、2021年10月8日実施)

○非認知能力の育成について、保育園で重視していくことについてどう思われますか？

・よい(14/15名) おおむねよい(1/15名)

○園の取組によって、お子様の非認知能力が伸びたと思われることがありますか？

・ある(11/15名) ない(0/15名)
わからない(4/15名)

○園での取組によって、お子様の非認知能力が伸びたと思われることについてお教えください。

・今、子どもに聞いても「先生がプラスの声をかけてくれたから自信になった」「みんなと流しそうめんとか劇とかいろいろなことをたくさんやれて楽しかったし、頑張れるようになったし、自信がついた」と言っています。親としても先生が子どものことをよく見て下さり、たくさんほめて下さったのと、様々な活動をさせていただき、それが子どもにとってよい経験になり、非認知能力が伸びたことにつながったと思います。

・子どもに保育園に通ってよかったことを聞いてみました。「鉄棒の逆上がりのことで先生方にほめていただいてから自ら進んで公園に行き、練習を続けて運動会で皆の前で発表できたのがいい思い出」だとのこと。普段はおとなしい性格で先生に話しかけるのもできない子でしたが、ほめていただいたことで頑張る気持ちが芽生えて練習して、運動会でたくさんの方々にほめていただいたことが今も根付いていると思います。

・息子が年長の時の運動会のリレー競技で自分のチームが勝っても負けても、お互い拍手で讃える行動が今でもそういった気持ちを大切にしている所が伸びたと思います。相手の気持ちを考える思いやりの心を伸ばしていただいたと思います。

・自尊心が伸びたと感じております。日々の生活のなかで、先生方がとにかくたくさんのお話をほめていただき、またおともだちのがんばりを共有してくださっ

たこと、注意・指導の際は必ず本人の気持ちを受けとめてから、お話しして下さったこと、ありがたく思っています。

- ・どの非認知能力も伸びたと思います。保育園では1歳児クラスからお世話になったので、小学校にあがった時も特に問題なく学校やクラスになじめていたようにみえました。やはり、小さい時からの集団生活をする中で、先生たちにも色々声をかけていただいたり、見守っていただいたりしたのがよかったと思っています。今では、自ら学級委員に立候補してクラスをまとめようと頑張っています。
- ・担任だけでなく、園全体の先生方の愛情や、頑張りを認めてくださる姿が日常的にあり、自分や友だちのことを大切に感じられるようになったと思います。
- ・0歳児から通って、担任ではない先生や友だち、お兄さん、お姉さん、実習の先生とたくさんの人に囲まれて、刺激を受けながら、担任の先生が見守ってくれる関係が良かったと思います。新しい環境になっても、すぐ友達を作って、楽しんで過ごせます。

非認知能力は園のみで育つものではない。

また、客観的に評価できるものでもなく、評価が容易でない点があるが、保護者評価により、次の点が明らかになった。

- ・非認知能力の育成の重要性については、いろいろな機会を通じて、保護者の理解を得ることが不可欠である。
- ・園の保育の方針や園の環境が、非認知能力の育成に少なからず影響をもたらしている。
- ・保育者の子どもへの肯定的な見方、時間をかけ、一貫して丁寧に関わるのが重要で

ある。

- ・保育者から子どもの姿の価値づけ・報告を基に、保護者と共通認識に立ち、子どもに関わることが重要である。

乳幼児期に非認知能力の育成に努めることの重要性をふまえ、園全体で取り組むとともに、子どもの生活環境を工夫し、子どもに愛情を注ぎ、肯定的に関わっていくこと、家庭との連携の重要性を確認できた。

最後に、あるの保護者の言葉（調査での記載内容から引用）を記す。

発達段階に応じた非認知能力の育成・方法について、今後さらに研究を深め、小学校及びそれ以降の学習・生活に確かに生きるように努めたい。

○小学校に上がる前の経験（やってきたこと）は小学校生活を送ることに大きく関わると感じています。保育園時代に仲間と関わりながら多くの経験をさせて頂けて本当によかったです。

参考文献

- 1) これからの幼児教育（2015）ベネッセ教育総合研究所 P2-13
- 2) ジェームズ・J・ヘックマン（著）大竹文雄（解説）古草秀子（訳）（2015）幼児教育の経済学 東洋経済新報社 P10-42
- 3) 保育ナビ（2017-11）幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿とは？ フレーベル館 P10-21
- 4) 保育所保育指針解説（2018）厚生労働省編 フレーベル館 P2-9 P60-83
- 5) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 無藤隆（編著）東洋館出版社 P34-57, 160-161
- 6) 中山芳一 非認知能力が子どもを伸ばす（2018）東京書籍 P12-44